

自然物の中で三大栄養素を多く含むから美味しいと感じる物が食材となり、まずい物が薬材となる。そして薬材がその効能・使い方が明らかにされた時に、それは生薬となる。今回はそうした事を説明した。

効能・使い方がどう明らかにされているかが生薬にとって重要であるわけだ。「薬毒一如」であるから、効能・使い方と無関係に「薬」であることはできない。「薬」のつもりで「毒」を摂取することになりかねない。

私が学んでいる古方派漢方は使う生薬の種類が、他流派に比べて、かなり少ない。一見、種類が少ない為に、様々な病態に対応できず、他流派に比べて劣る様に見えるがそうではない。逆に限られた生薬を使うからこそ、その効能・使い方に精通し、生薬を加減し、組み合わせることで、様々な病態に対応できるのである。効能・使い方がより明確にされることで、生薬の薬としての価値を高めている。

生薬とされる薬材にも、どれだけ効能・使い方が明確にされているかは様々である。また、明確にされていると言っても、それは病態の捉え方と密接に関係し、その違いによって、表現も異なっている。

例えば、西洋医学の高血圧の薬でも、ただ「高血圧に効く」と言うだけでは、本当のところを表していない。高血圧にさせる要因の何にどう効くのか(機序)が明らかにされる必要がある。一様に「高血圧に効く」とされても、機序を含めた効能は異なっている。例えば、血管内血液量が多ければ、血圧は上がるので、利尿によって降圧する利尿降圧剤。血管の壁を構成する平滑筋の収縮緊張を抑制するカルシウム拮抗薬。血管は交感神経亢進で緊張するので、交感神経の亢進を抑制する交感神経遮断薬等である。つま

り、より明確にされた効能によって使うことで、初めて「薬」として作用し、そうでなければ「毒」と作用する。

漢方では流派によって、病態の把握の仕方が違うから、生薬の効能を把握する仕方も違う。例えば、人参(朝鮮人参)は古方派では、ミゾオチ辺りの痞えをとるものと把握されているが、他流派では、「大いに元気を補う。新陳代謝を促進する」(高山安世編著『漢方常用処方解説』)とか、「五臓を補い、精神を安んじ、魂魄を定め、驚悸を止め、邪気を除き、目を明らめ、心を開き智を益す。久しく服せば、身軽く長寿となる」(《神農本草経》)と捉えられている。

ミゾオチ周辺が痞えれば、横隔膜は下がりにくく呼吸が浅くなり、またミゾオチ周辺の臓器である胃などの働きが落ちる。更に、ミゾオチは体の中心であり、そこが痞えることにより上下の〈気〉の交流が妨げられ、熱の産生場所である胸には熱が溜まり、逆に水気の多いお腹は冷える。よって、消化吸收能力が落ちるから元気がなくなり、一方、胸は心の場所であり、深い呼吸ができないから、精神的な症状が生まれる。つまり、古方派の捉え方と他流派の捉え方とは違っているようで、〈ミゾオチの痞えを取る → 元気を補う。精神を安定させる。〉という形でつながっている。しかし他流派の効能に従って、元気がない人や精神不安定な人に人参を使ったとしても、ミゾオチの痞えがない人には効かないだろう。原因は他にあるからだ。

さて前回、ナタ豆の話題から書き出したが、「刀豆ナタマメ協会」のサイトによれば、薬材としては豆(種子)が使われ、排膿・抗炎症作用により、歯周病・痔・蓄膿等に効き、食材としては若いサヤが使われ、福神漬けに入っているという。(2014年12月冬至)